第10講座 古文

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

*4今は昔、木こりの、*1山守に*2斧をとられて、わびし、*3心うしと思ひて、頬杖(つらづえ)つきてをりける。①山守見て、「*5さるべきことを申せ。③とらせむ。」といひければ、④

*6あしきだになきはわりなき*7世間(よのなか)によき⑤をとられてわれいかにせんと詠(よ)みたりければ、山守、*8返しせむと思ひて、「ううううう」とうめきけれど、*9えせざりけり。さて、⑥斧返しとらせてければ、うれしと思ひけりとぞ。ひとはただ、歌をかまへて詠むべしと見えたり。⑦*10

（『宇治拾遺(うじしゅうい)物語』）

＊1山守＝山の番人。　＊2斧＝手おの。　＊3心うし＝情けない。
＊4頬杖＝ほおづえ。　＊5さるべき＝（この場に）ふさわしい。
＊6～だに＝～でさえ。　＊7わりなき＝何かと困る。
＊8返しせむ＝返歌しよう。　＊9えせざりけり＝できなかった。
＊10かまへて＝心して。

問一　――線①「をりける」、④「いひければ」、⑦「かまへて」をそれぞれ現代かなづかいに直しなさい。

①（　　）　④（　　）　⑦（　　）

問二　――線②「山守見て」とありますが、「山守」は何を見たのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　木こりがくやしがっている様子。
イ　木こりがさめざめと泣いている様子。
ウ　木こりが何かを言おうとしている様子。
エ　木こりが困り果てている様子。

（　　）

問三　――線③「とらせむ」とありますが、何を「とらせむ」と言っているのですか。古文中から書き抜(ぬ)きなさい。

（　　）

問四　――線⑤「よき」という言葉には、何と何の意味がかけられていますか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　よいものと、手おの。　イ　よいものと、山の番人。
ウ　手おのと、山の番人。　エ　木こりと、手おの。

（　　）

問五　――線⑥「斧返しとらせてければ」とありますが、なぜ山守は斧を返すことにしたのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　木こりが仕事をしなくなったから。
イ　木こりが筋の通ったことを言ったから。
ウ　木こりがすばらしい歌を詠んだから。
エ　木こりが堂々と文句を言ったから。

（　　）

問六　教訓が述べられている一文を古文中から探し、その初めの五字を書き抜きなさい。

2 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、池の辺に蛙の数多集りて言ふやう、「（中略）いかにもして人の如く立て行くならば良かるべし。いざや観音に願を掛けて立事を祈らむ」とて観音堂に参りて、「願はくは我等を*1憐み給ひ、せめて蛙の身なりとも□の如くに立て行く様に守らせ給へ」と祈りける。誠の①心ざしを哀れと思召しけん、その儘後の足にて立上りけり。*2所願成就したりと喜びて池に帰り、「さらば連立ちて歩きて見ん」とて陸に立並び、後足にて立て行けば、目が後になりて一足も②向へ行かれず。先も見えねば*4危さ言ふはかりなし。「これにては③何の用にも立たず。只本の如く這はせて給はれ」と祈り直し侍べりと言へり。

（浅井了意『浮世物語』）

*1憐み給ひ＝お哀れみになって。

*2思召しけん＝（観音様が）お思いになったのであろうか。

*3所願＝願い。

*4危さ言ふはかりなし＝言いようがないほど危なっかしい。

問一 □にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 蛙　イ 犬　ウ 人　エ 牛

問二 ——線①「心ざし」の内容として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 立って歩けるようになりたい。
イ お金持ちになりたい。
ウ 這って歩けるようになりたい。
エ できるだけ強くなりたい。

問三 ——線②「向」とはどの方向ですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 体の前側。　イ 体の後ろ側。
ウ 体の右側。　エ 体の左側。

問四 ——線③「何の用にも立たず」とありますが、どんなことが何の役にも立たないのですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 蛙として生きること。
イ 目が見えること。
ウ 後ろ足で立って歩けること。
エ 観音様に祈ること。

問五 蛙が立って歩けなかったのは、なぜですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 立ち上がるとくらくらして、目の前が真っ暗になるから。
イ 立ち上がると見える景色が一変し、恐ろしいから。
ウ 立ち上がると目が後ろになり、前が見えないから。
エ 立ち上がると足もとがふらついて、危なっかしいから。

問六 この話の蛙を評した言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 命知らず
イ 付和雷同
ウ 三日坊主
エ ないものねだり

練習問題

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

千代女は加賀の松任の人にて、幼きより風流の志ありて、俳諧をたしなむ。しかれども、その師を得ず。①これかれ行脚の人に問ふに、②美濃の盧元坊を称することみな同じ。ここにして、ことさらに行きて学ばんと思へるに、折しも、③行脚して来りしかば、その旅宿に着いて*2相見を請ひ、志を述ぶ。元坊、草臥れたりとて寝てありしところへ行きて、教へを求むるに、さらば一句せよ、と言ふ。夏のころなれば、時鳥を題とす。やがて句を吐きたるに、*3元そのただ者ならざる気韻を見て、④その句を肯はず、これは誰もすべきところなりと言ふ。さらばとて、また一句を吐く。なほ肯はざること初めのごとし。元は既に眠りにつけども、女はなほ去らず、*6沈吟す。その眼のさめたるをうかがひては、また一句を問ふ。かくて、数句に及び、つひに暁天に至る時、元起きて、終夜去らざりしや、夜は明けたりや、⑤とおどろく。時に千代女、

ほととぎす郭公とて明けにけり

と言へるを大いに賞し、これなりこれなり、汝他日この意地を忘るることなくば、名、天下にふるはんと、師弟の約をなせり。はたして、女流にめづらしきこの道の高名に至れり。これは、まだ少女の時なりけらし。

（三熊思孝『続近世畸人伝』）

＊1行脚の人＝国々をめぐる修行僧。　＊2相見＝面会すること。
＊3元＝盧元坊。　＊4気韻＝気品のある感じ。
＊5肯はず＝承諾しない。　＊6沈吟す＝深く考えこむ。

問一 ――線①「これかれ行脚の人に問ふ」、③「行脚して来りしかば」、⑤「おどろく」は、それぞれだれの行為ですか。古文中から書き抜きなさい。

①（　　）　③（　　）　⑤（　　）

問二 ――線②「美濃の盧元坊を称する」とは、どういうことですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　美濃の盧元坊を賞賛し、俳諧の師として薦めたということ。
イ　美濃の盧元坊に教わったことを自慢したということ。
ウ　美濃の盧元坊を名乗り、俳諧の師になろうとしたということ。
エ　教えを乞うため美濃の盧元坊をさがし回っていたということ。

（　　）

問三 ――線④「その句を肯はず」とありますが、盧元坊が千代女の詠んだ句を認めなかったのは、なぜですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　千代女の普通でない様子を見て、早く追い返してしまおうと思ったから。
イ　千代女の句のつまらなさに失望して、早いうちにあきらめさせようと思ったから。
ウ　千代女の才能を見抜いて、よりレベルの高い句を詠ませようと思ったから。
エ　千代女の豊かな才能をねたみ、自信をなくさせようと思ったから。

（　　）

問四　Aさんは、古文の内容を〔ノート〕にまとめた。古文と〔ノート〕を読んで、あとの(1)～(5)に答えなさい。

〔ノート〕

千代女と廬元坊との出会い

千代女…幼いころから［A］があり、俳諧をたしなんでいた。

→師がいなかったので、廬元坊を俳諧の師として学ぼうと思った。

←

廬元坊のいる旅館を訪ねて、［B］。

廬元坊の対応と千代女の反応

廬元坊…教えを求めた千代女に、一句詠むように言った。

→千代女は［C］を題とした句を詠むが、何度詠んでも認めなかった。

←

千代女…廬元坊が眠りについても「a その眼のさめたるをうかがひては」句を詠んだ。

廬元坊が千代女を弟子とする

明け方に詠んだ句

「ほととぎす郭公とて明けにけり」

を、廬元坊が認めて「汝他日この意地を b 忘るることなくば、名、天下にふるはん c」と言って千代女と師弟の約束をした。

→この結果、千代女はこの道（＝［D］）で有名になった。

(1)　［　　］A・C・Dにあてはまる言葉を、Aは四字、C・Dは二字で、古文中からそれぞれ書き抜きなさい。

A［　　］

C［　　］

D［　　］

(2)　［B］にあてはまる言葉を現代語で書きなさい。

［　　］

(3)　線a「その眼のさめたるをうかがひては」の意味として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア　千代女の目がはっきりするのを待っては

イ　廬元坊の目がさめるのを見はからっては

ウ　千代女の目が眠たそうなのをがまんしては

エ　廬元坊が目をさますように声を出しては

［　　］

(4)　線b「この意地」とありますが、どんな意地ですか。「一晩中」という言葉を使い、二十五字以内で書きなさい。

(5)　線c「名、天下にふるはん」とありますが、この内容を一言で表した言葉を、古文中から二字で抜き出しなさい。

［　　］